

「国際俳句に関する日本伝統俳句協会の取り組み」

講師：稲畑汀子

2005年5月21日(土) 11時30分

稲畑 ご紹介いただきました稲畑汀子でございます。今日は国際俳句交流協会の15周年のお祝いということで、心よりお喜び申し上げます。私もは初めから関係させていただいておりますので、この会が順調に発展していていることは大変うれしいことですし、またそのきっかけになりましたいろいろな方のたゆまないご努力に対して、大いに敬意を表し、そして感謝申し上げる次第でございます。

私は日本伝統俳句協会の会長をしておりますけれども、この国際俳句交流協会の顧問をさせていただいております。何一つお手伝いをしていないので、もう少し何かさせていただかなければならないのではないかという思いもありながら、できないんです。それで今日は、15周年だから私に何か話をするようにと永田さんから頼まれて、私はとてもそんなお話しはできないとっておりましたが、何でもいいからしゃべれということでございますから、何でもいような話になってしまうかもしれませんが、50分ぐらいのお時間を皆様からちょうだいして、ここで話し上げたいと思います。

私たち日本伝統俳句協会は、昭和62年(1987年)に発足いたしました。その年の3月に、日本の有志たちとドイツ、イタリアへ旅をいたしました。そのときのお話からちょっと始めさせていただきたいと思います。

その年の3月、私たちはまずミュンヘンに参りました。そこでは雪が降っていたんです。3月、もう立春が過ぎておりますから、私たちは「春の雪」もうどこにいても俳句の句帳に書きとめる、そういう旅でしたから。そういう中であって、ミュンヘンの方々と俳句を語る会を持つことができたわけです。

そこには、薬品会社の会長をしていらっしゃるギュンター・クリングさんという、そのころはそんなにご高齢とは思っていなかったですけども、ある程度のお年でいらっしゃいまして、でも日本には毎年いらっしゃって、俳句に関して大変興味を持った方でございます。

そのとき私はミュンヘンで「俳句を通しての季題の意味」という講演をさせていただいたんです。その講演のために、前もってドイツの方々と談話会でしょうか、まず一緒にお昼のお食事をして、その後、輪になってみんなでいろんな意見を述べるという、そういう機会を持ちました。会場はバイエリッシャーホーフ(BAYERISCHER HOF)、ドイツのミュンヘンの大変立派なホテルです。そこで独日俳句討論会をするということで、日本から

は8名、ドイツからは10名参加してくださいました。

そこにいらしたメンバーの名前をちょっと申し上げますと、キルムゼさん。この方は獣医でいらっちゃって、絵もかかれる方です。プレントロップさん。ハミッチュ教授。この方は、私の『自然と語りあうやさしい俳句』を独訳してくださったスズキ先生の訳をドイツ人にわかりやすく書き直して、ドイツ語の本として学生たちに配っていただいた、その力を貸してくださったのがハミッチュ教授です。それから、もちろんクリングさん。グロイス・マイヤーさん。皆さん、俳句をおつくりになって（俳句に）大変興味がある方です。それからハインリッヒさん。この方は本当に日本が好きで、日本語を大事に勉強していらっしゃった方だと思います。ケルパー氏。これは高校の図工の先生です。それからシェパル氏。クリングさんの秘書のディーコフさん。通訳としてツェルゼンさん。そういう方々と日独交流のための会合をしたわけです。

日本側は、私と、その翻訳してくださったスズキマサジ先生。甲南大学の元学長をしていらっしゃった方です。それから朝日新聞の元朝日俳壇の担当の濱川博さん。それから、今日お見えになっていらっしゃる永田龍太郎さん。田中竜児さんという絵かきさん。桑田青虎さん、千原叡子さん、千原草之さん。みんな私たちの仲間です。そういう8名とその方たちと一緒に俳句を語り合おうという時間を持ったわけです。そのときはまだ日本伝統俳句協会はできていなかったんです。

ミュンヘンにおいてそういうふうな討論を行うときに、外は雪が降っていたんです。私は、入り口でハミッチュ教授とばったり出合って、そのときハミッチュ教授の長いまつげの上に雪がたまっていたのを、いまだに忘れられないでおります。それくらい雪がしんしんと降っていたんです。

それで話し合いの最中に、私は「さあ、今日は皆さんと1句ずつ出して俳句会をしましょう」と提案いたしました。俳句会というのは、いい俳句を選んでみんなが発表するわけです。選句をするわけですが、ドイツ人の方々は「詩人に対してそんな失礼なことはない」と。自分のつくった句に対して、ドイツ人が10句、日本人が8句、18句の中から、例えば5句だけ選ぶ。「そんな失礼なことをしないでほしい」とおっしゃいました。

ドイツ人は何でもズバズバおっしゃって、とても難しいなと思ったのですけれども、でも「まあいいじゃないですか。こういう機会にぜひ俳句会をしましょう」と言って。みんな1句。翻訳しなければならないので、と

でも時間がかかるわけですがけれども、それで俳句会をしたんです。いいぐあいに私はクリンゲさんの句もとらせていただいて。大体わかるんですね、内容的に。とらせていただいてよかったなと思っているんですけど。

そういう中で「じゃ、外に雪が降っているので「春の雪」という題を出します」と。そしたらドイツ人の方が「春の雪なんていう言葉はない」とおっしゃった。「でもね、春になって雪が降ると「春の雪」という、私たちはそういう季題でつくっているんですよ」と言ったら、「春の雪なんてない」と。「じゃ、いつ春なんですか」と言ったら「雪が降らなくなったら春だ」と。(笑)そういうふうな難関をクリアいたしまして、俳句会をしたんです。

それは、伝統俳句協会の『花鳥諷詠』という雑誌がありますけれども、これの20号に載っていると思います。皆様のお目には触れないような感じですがけれども、それを私は拡大して今日は持ってまいりました。

それで、非常に和気あいあいとなってきて「それじゃ、もっと春になったなという思いになるような言葉はないですか。あなた方は、春になったなと思うのはどういうときですか」と言ったら、「子供たちが外へ出てローラースケートを始めたら春だと思う」と。「それじゃ、ドイツの季題として「ローラースケート」なんかいいですね」と。春になったらローラースケートをみんなですて、ああ、春になったなと思うとおっしゃったから。

私は、日本の俳句の押しつけではなくて、ドイツにはドイツの詩人がいて、ドイツの詩人たちがいろんな言葉をつくって、季節感を持っている事柄、あるいは言葉をつくって、それがドイツの歳時記となって発表されたらいいですねというふうに申し上げたと思います。

俳句の歴史というのは、芭蕉もあり、蕪村あり、ずっと続いてきて、そして正岡子規が俳句革新運動をなされた。それでずっと続いている伝統俳句というのは、やはり季題というものを詠むのが俳句であるというふうには私たちがなんかも絶対に言っているわけですがけれども、そういうふうな形でもって進んでいくように、ドイツにはこれからドイツの季題というものが新しく生まれて、それから短い詩として、3行詩でもいいです、3行詩としてずっと生まれていって、ドイツの俳句がそこで確実な位置づけをしていくというのが、私は本当の意味での国際俳句ではないかなと思ったんです。

その1987年の3月に旅をして、ミュンヘンへ行きました私に講演をさせていただいたときも雪が降っておりましたけれども、その後、ヴァチカン

をお訪ねいたしました。この会を最初に始められた内田園生さんとおっしゃる方がヴァチカン大使をしていらっしゃるしまして、私たちが行くのを、永田さんのお世話だと思えますけれども、内田さんにいろいろお骨折りいただきまして、そのときの教皇様に謁見を賜るという機会をつくっていただきました。考えられないくらいすばらしい謁見の場をつくっていただいたんです。それは、この間お亡くなりになった方ですが、あの方は大変すばらしく心の広い、そして大勢の人たちに手を差し伸べておられる教皇様でいらっしゃいます。カトリックのローマ法王です。

普通ならば、全国の信者の人たちが集まって、広い場面で、教皇様が一人一人を祝福なさるといってより全体を祝福なさるのですが、私たちは別な部屋に連れて行っていただきまして、一人一人、こう手を差し伸べて、キスしたり、あるいは祝福してくださったりして謁見していただいたんです。もう私は涙がこぼれそうなほどうれしかったです。本当にすばらしい機会でした。内田さんが大使をしていらっしゃるおかげで、そういう機会をつくっていただいたわけです。

そのときに教皇様は、私たちに向かってメッセージをくださいました。それは日本語で言ってくださったんです。「日本でも一流の俳句の詩人方が私に会いに来てくださったことを深く感謝するとともに、私も皆さんにお会いできて心からうれしく思います。俳句は、短い言葉の中に深い意味を込める芸術だと聞いています。皆さんが俳句をもって人々の心を豊かにされるとともに、ますますすぐれた作品を生み出されるよう期待いたします。今日の皆様のご訪問に重ねて感謝いたします。ありがとうございました」と。こんなことを教皇様から言っていただいて、本当にもうびっくりしてしまったわけですがけれども。

日本語で、もちろん書いてある紙にはローマ字で書いてありましたけれども、それをスムーズに、こんなにスムーズではないですがけれども、ともかく、とつとつと言ってくださいました。それでみんな祝福されて。カトリックでない方はわかっていたかどうかわからないですがけれども、みんなその場の雰囲気でもう感動いたしました。

それから大使館にお呼びいただきまして、ヴァチカンの大使館で、一緒に旅をしていた人たちと俳句会をいたしました。何か非常にそのころの印象は鮮明に覚えているわけですがけれども、その1987年という年は特別な年になったわけでございます。

その後、日本に帰りまして、4月8日に私ども日本伝統俳句協会を立ち上げたわけです。それまでは日本伝統俳句協会というのはなかったんです。「ホトトギス」が母体としていろいろと活動していても、やっぱり一俳誌としてしか見てもらえない。これは協会をつくらなければ大変だということ。

実はそのヴァチカンの後、ミラノで、私たち仲間の4～5人で「ミラノ会談」というのをしたんです。何かすごいでしょう。(笑)いまだに忘れられませんけど。場所は、サントリーのレストランでした。一つの部屋をいただいて、そこで私が「実は、日本伝統俳句協会を立ち上げます」ということを、その何人かに申し上げて。「日本に帰ったら早速、4月8日の虚子忌の後の同人会で、日本伝統俳句協会を設立するということをみんなに発表します」と申し上げたんです。そこにいらっしゃる方は、もちろん、内々にもうご存じだったかもしれませんが。

それで日本に帰ってきて、その次の月です。4月8日に、鎌倉の華正樓という中国料理屋でした。同人会の席上で、マスコミをお呼びいたしまして記者会見をしたんです。みんな、そんなことになれていない者は何かおたおたしてしまいましたけれども、ともかく、そこで発表して。そのときに先頭に立ってやってくださったのが大久保橙青先生でした。今、司会をしてくださった大久保白村さんはそのご令息です。「いざ、鎌倉」と言って。(笑)そこで伝統俳句協会を立ち上げ、6000人ぐらい会員がパッと入っていただきました。

どうして「ホトトギス」があるのに屋上屋を重ねるようなことをするんだということ、私はもう本当に痛いほどみんなに言われました。みんながそういうことで「どうして」「どうして」ということで、私は「どうしても」「どうしても」と言ったんです。それがだんだんわかってきていただきまして、ほかの俳人協会も現代俳句協会も、皆さんがその存在を認めてくださるようになるには、ちょっと時間がかかったかと思います。でも、一生懸命にすれば何でも事は成就するというふうに思って、社団法人の認可をいただくために、今の文部科学省ではなくて文部省の文化庁に日参いたしました。そのときにも大久保橙青さんがずっとついてきていただきました。

そのときの文部大臣が塩川正十郎さんでした。塩爺さんですね。(笑)今はちょっとやせていらっしゃるかもしれませんが、あのときはこんなかっぶく

のいい方でした。それで「ああ、俳句は日本で唯一の海外へ輸出できる、自慢できるものですね」とおっしゃいました。「ほかの芸術あるいは文芸は、大体、西洋のほうから入ってきている。でも、日本で唯一誇れるのは俳句しかない」と。「そうございましょう」私もすぐ同調して「そうです、俳句しかないんです。ですから私たちが立ち上げた、ちゃんとした有季定型の俳句に対して、ぜひ社団法人を認可していただきたい」と言いました。

私は強引な人間ですので、もう日参してそれをお願いしてまいりました。そういうふうないきさつもございまして、一年半たって認可していただいたわけです。そのときの条件といたしまして「日本唯一の誇れる俳句、それを海外の人たちにもわかってもらえるような活動をしていただけますか」と言われたんです。「もちろん、いたします」と申しました。

それで、伝統俳句協会ができるときに、何をしていこうかというときに、文部大臣にそうおっしゃられる前から私たちは、隔年に毎年だと大変ですから、隔年に「国際俳句シンポジウム」というのを立ち上げましょうというふうに申し上げたんです。それで、今でも隔年に続けています。もちろんクリンゲさんにも来ていただき、それから大勢の外国の方にも来ていただきまして、隔年にやっております。

文部大臣は、一年半たちましたら社団法人を認可してくださった。それは、一つの団体があって、その団体が社団法人として認可されているならば、ほかには同種類の団体に認可はあげられないという決まりがあるんです。どうしていただいたかという「私たちは有季定型を守る伝統俳句を推進していく団体です」と。「ほかはみんな、そうじゃないです」と。まあ、そうじゃないことはないんですよ。(笑)それはへ理屈かもしれないですけど、やっぱりそういうことを主張して、主張して、主張して、認可をちょうだいしました。

それから、やっぱり文部大臣の塩川さんに頼まれたことは守っていかなければならない。それで守っていこうと。今でも、今度は来年の2月20日に芦屋で、芦屋国際俳句祭と国際俳句シンポジウムとを合併してやります。これは隔年にやって、まず第1回目はどこでやったかという、日本一の富士山でやりました。山中湖のほとりにございますホテルマウント富士。そこでサイデンステッカーさんにも基調講演をお願いいたしましたら、快く来ていただきました。

でも、サイデンステッカーさんのお話を伺っていたら、ああ、これは外国の方に俳句は無理だなと思うような話にだんだんなっていきます。なぜかという、自分は源氏物語や何かを翻訳した。日本語の表現は難しいけれども翻訳したと。しかし、俳句は翻訳できませんとおっしゃいました。例えば、芭蕉の「山路来て何やらゆかし堇草」。「何やらゆかし」なんて英語で翻訳できないとおっしゃった。それから、萩の花とかススキとか、そういう花はアメリカにもありますよと。でも、みんな花なんて思ってやしない。普通の何でもない草だと思っている。だから、それに興味を持つかどうかわからないと。

でも、サイデンステッカーさんの話は大変おもしろく伺わせていただいて、ああ、それじゃ、どうするべきかということはみんなで考えなければいけない。でもやっぱり自然を詠むということは、各国の方にとって決して無駄にはならないだろうと私は思いました。

そのときに日本人の代表として、藤松遊子さんという、お亡くなりになったのですけれども、こういうお話をなさいました。川端茅舎の「金剛の露ひとつぶや石の上」。大変すばらしい俳句です。夜露がおりて、石の上に夜露が玉を結んでいる。「金剛」といったらダイヤモンドですね。「金剛の露ひとつぶや石の上」。

しかし、その「金剛」という言葉に出会うまでには、川端茅舎は、いろんな推敲をしてそこに至ったと。最初はそうではなかった。最初は「石の上ひとつぶ露の玉光る」、そういう俳句を推敲して、推敲して、それで「金剛の露ひとつぶや石の上」という、その名句に至った。その推敲は、日本人の言葉の意味というものを本当に深く知らなければ、こういう句はできないと。

そのときにクリンゲさんがいらっやって、通訳を通してですけれども、そのときにコーディネーターをした稲岡長さんが「クリンゲさん、この二つの俳句のどっちがいいと思いますか」と聞いてくださいました。「金剛の露ひとつぶや石の上」と「石の上ひとつぶ露の玉光る」、どっちがいいですかと。これは翻訳するのが難しいですね。両方とも同じように翻訳なさったと思いますけれども。クリンゲさんのお答えは「両方ともよい」と。(笑)俳句の翻訳というのは、短い詩ですから、その中からどれを翻訳するかというのは、大変難しい問題をはらんでいます。

サイデンステッカーさんがおっしゃったように、俳句の翻訳というのは

大変難しい。しかし、今ここにいらっしゃる星野先生とか、皆さんは、本当に素晴らしい翻訳をしていらっしゃるから、もちろん、できないなんていうことは言えない。

この間、クリンゲさんが出された直訳の言葉を日本の俳句に直して、それを本にして出せという命令が私に下ったんです。それで困ったなと思ったんですけど、私は、一生懸命それを俳句につくりまして、本にして、クリンゲさんにお送りしました。とても喜んでくださいましたけれども、もちろん私の直した日本語なんておわかりにならないです。

でも、やっているうちに、私は1句、無季の句をつくってしまいました。でもそんなことは知らん顔しているんですけどね。やっぱり、そういうことが出てきてしまいます。私は無季の句をつくるつもりはなかったのですが、〔ユウセン?〕の雰囲気を持っている一句に仕上がったんです。それは求龍堂から出していただいております。そんなにたくさんはないですけれども、欲しい方があったら、おっしゃっていただいたらお手に入るかと思えます。

そういうふうに、翻訳するのは難しい。しかし、それぞれその国に適した季題というものをつくっていけばいいと思うんですね。その国に沿ったものを歳時記としてつくっていくということを一步一步していかなければ無理ではないかというふうに私は思います。「春の雪」にしても「ローラースケート」にしても、ドイツの歳時記ができていく、そのきっかけになればすごくいいなと思えます。

前に筑波大学にいらした加藤慶二先生が、最近、永田（書房）さんから『虚子編新歳時記』の中でドイツに訳せるものを歳時記として出してくださいました。あれは、はじめにクリンゲさんが「ぜひとも翻訳してください」とおっしゃいまして、加藤慶二先生とシャウマンさんとがそれにかかって、とうとう6年たってもできないので、クリンゲさんはもうギブアップなさったんです。

- - 10年。

稲畑 10年でしたっけ。10年たってできなかった。今どうしてできたかという、それをコツコツ、コツコツ、永田さんと、お互いに我慢のしどころですよ。これは本当に難しかったと思います。虚子記念文学館のほうの仕事としても援助をさせていただいたわけですが、今日伺いましたら、こちらのほうからも援助していらっしゃるということで、私はすごくうれ

しいのですけれども。とうとうできましたね。あれはまだたくさんある？

- - たくさんでもないですね。ドイツに大半を送ってしまうんです。

稲畑 ああ、そうですね。やっぱりドイツ人でなければ、私たちが見たってわからないですからね。ドイツ語のおわかりになる方はもちろんいいですけれども。ドイツの方たちがそれを見て、ああ、日本の歳時記はこんなものかというふうなことをわかっていただいたら、それはすばらしいなと思います。

昭和 11 年（1936 年）に、虚子はペンクラブのご招待を受けて英国へ参りまして、帰りにドイツに寄って、ベルリンで講演をいたしました。俳句について、短い詩であるということはみんなに理解してもらったけれども、季題に対しての理解はしてもらえなかったということを「ホトトギス」に書いております。だから、やっぱりそのところでもう季題ということに対しての一つのネック、かせはできているわけですね。でも私はそうではなくて、その国において季節感というものが持てたら、それはまた一つのすばらしい俳句の世界が開けるのではないかというふうに思うんです。

いろんな国のあれがありますね。宗教も違い、日本とヨーロッパ、アメリカ。今はあちこちで戦争をしていますけれども、やっぱり宗教の違いということに本当にひっかかりができてしまっていると思います。自然に対する自然観というものも、日本人と西洋人とは違います。西洋の方々は「自然は人間に対峙するものである」と。人間対自然。東洋的な思想としましては「人間は自然の一部である」と、そういうふうに考えます。もちろん、いろんな考え方が西洋から入ってきているから、そういうことが必ずしも全部だとは言えませんが。

そういうこともございまして、私たちの伝統俳句協会は、国際俳句シンポジウムを隔年に行っている中で、テーマとして「人間と自然」について 5 回ぐらい行いました。そこには大勢の方々に参加していただきました。有馬先生にも参加していただきましたし、いろんな方に参加していただきました。もうだいぶ時間がたっておりますけれども。

西洋の考え方と日本の考え方とがここまで違うということですが、私は、それがだんだん近づいてきているのではないかと思います。必ずしも対峙する 人間と自然は向き合っているものだと、あるいは自然を利用するとかいろんな考えがありますが、そうではなくて日本人は「自然に抱かれて」とか。だけど西洋人は「山を征服する」と申しますね。や

はりそういうことを言おうとしたら「対峙する」という言葉が一番ぴたりするような気がしますけれども。

でも、同じ地球に住んでいる人間である以上は、やはり地球が大切だと思うんですね。地球の中で自然が破壊されていくことを黙って見ているわけにはいかないような気がするんです。ですから、私たちがそういう自然に対しての考え方を、しっかりと皆さんに。俳句というものをつくることによって、自然を見る目が違ってくる。自然を見る目が違ってきたら、やっぱり地球を大事にしよう、自然を大事にしようという。

私は、俳句というのは唯一日本で誇れるもので、日本が唯一輸出のできるものだというふうに塩爺様から伺いましたけれども、でもそれは、輸出するとかそういうことではなく、みんなで自然を考える。それは、俳句をつくっているうちに、自然というものを見る目がだんだん同じ人間になってくる、人間の見る目というものが等しく親しくなってくる。そうすると、自然を詠む、そして自然に向かって感動する、あるいは自然を恐れる、そういうふうな心持ちは、世界の共通語になってくるのではないですか。世界の共通語になっていくという大きな可能性を含んでいるのが、私は、俳句ではないかと思うんです。

今まで、いろんな国の方ともお会いいたしました。アメリカばかりではなく、ドイツ。シンポジウムを通して、私たちは5回ぐらい「自然と人間」というのをやってきて、今は「定型について」というのをやっています。それが来年で3回目になります。定型、短い詩である。アメリカの小学校で俳句を教えるといえます。それはなぜかというと、子供が集中できる。短い詩ということは、そこに言葉を込めるから、頭が散漫になっていたら俳句はできません。だから、俳句をつくるために、そこで物事を集中して考えることができるというふうになるわけです。

全世界の人たちが共通の認識、同じレベルで物事を考え、物事を理解していくことができるようになるには、俳句をできるだけ大勢の人に広めていくのが、これは我田引水であることは確かですけれども、でも、俳句を通して世界に語りかけていくということは、この国際交流協会の大事な役目ではないでしょうか。

ぜひとも私は、そういうふうな問題を提起して、これが必ずしも日本だけではなくて、外国に行ったらまた一歩から始めてほしい。そんなことを言ったら、たくさんもうアメリカのほうが俳人が多かったり、ドイツには

大勢俳人がいらっしゃったりすることは聞いておりますけれども。そういう中であっても、やっぱり私は、日本で唯一誇れる俳句を、これは海外の方に翻訳して伝えるというのではなくて、日本人は俳句をどのような形で作るようになったかという、その経緯というものをしっかり知っていただきたいということから始めなければいけないと思います。

でも、もう手おくれかもしれませんね。どうでしょうか。しかし、無駄になるかもしれないですけども、お互いにいろいろな試みをする。試みをすることによって、一つの共通の認識、考え方、そういうものがみんなの中に一つの輪をつくっていくことによって、そんな甘っちょろいことを言っただけでいかんと言われるかもしれませんが、私は、戦争ももしかしたらなくなるかもしれないと思っています。俳句は戦争を抑えるために、案外いいかもしれませんよ。

ドイツに行きまして、詩人たちと一緒に俳句会をした。あのときに詩人たちは憤然として、詩人は選ばれたりするものではないと。自分のつくった俳句は人に干渉してもらいたくないとおっしゃった。その後、自分の句が入ったらみんな喜んでいらっしゃいましたよ。(笑)そんなものなんですよね、人間の心というものは。自然に対して優しい、自然というものに抱かれて、私たちは、どのような生活の中にも一つの共通の世界が見出せるということは、こんなすばらしいことはないのではないかと思います。

私たち日本伝統俳句協会は、ほかの協会の方々と一緒に、今、国で主催する国民文化祭、それからねりんピック、そういうものに3協会がそろって参加して、大勢の方々に俳句を募集したりして、いろいろとそういう会を持っているわけです。日本人の中にも西洋的な考え方もするという人たちが、やはりふえてきていると思います。でも、それと同時に、私は、自然というものを見る心を、大事にするという気持ちをみんなに話していくことが国際俳句の使命ではないかというふうに思っているわけです。

もしかしたら、私の考え方は甘っちょろいかもしれません。世の中はそんなに簡単にはいかないということをよくよく知っております。でも私は、最初に協会を立ち上げる前に旅をしたミュンヘン、そしてヴァチカン、その後、ミラノの会談でみんなと話し合っただけで、日本に帰ってきて、虚子忌において、同人会において立ち上げた日本伝統俳句協会を、今、振り返ってみると、立ち上げて本当によかったなと思っています。

今はもう「ホトトギス」の屋上屋を重ねているなんて言う人はいなくな

りました。日本伝統俳句協会のために尽くそう、その日本伝統俳句協会が  
応援している国際俳句交流協会を応援しよう、そういう気持ちをみんなが  
持つようになってきました。

平和なんていうことはなかなか難しいです。実際にやってみなければわ  
からないということは確かだと思いますけれども。私は大体、考えている  
より先にもうやっている、そういう人間ですので、まずやってみて、うまく  
いったら、みんなが幸せになるような方向に向かっていきたい。そういう  
気持ちもございまして、今日は何か我田引水の話ばかりいたしましたけ  
れども。そろそろ時間ですね。

こんなことを話していたらまた一から全部話さなければならない。あの  
山中湖での第1回の国際俳句シンポジウムのサイデンステッカーさんの話、  
それから藤松遊子さんの「露ひとつぶや石の上」、その翻訳は大変難しいと  
いうことの、その先には、だからやめるかといったら、やめない。そうい  
うことをどういうふうな形で皆さんにわかっていただくかということ、  
これからもいろいろと暗中模索しながら努力して、世界に、俳句は日本の  
誇れる唯一のすばらしい文芸であるということを語り続けていきたいと思  
っています。

大変、何か取りとめのないお話を申し上げて申しわけなかったですけれ  
ども、皆様、ご清聴いただきありがとうございました。こういうことで  
今日の15回のお祝いの会を締めさせていただいたら悪いかもしれません  
けれども、今後ともこの国際俳句交流協会のご発展を心より願い、また私  
どものできる事がございましたら一生懸命お手伝いをしながら、ともに  
手を携えて進んでまいりたいと思っているということを最後にお伝え申し  
上げまして、話を終わらせていただきたいと思います。どうもありがとう  
ございました。(拍手)

司会 大変興味深いお話をありがとうございました。それでは、この後、  
10分ほどお時間をいただきまして、隣に準備しておりますが、懇親会を予  
定しております。汀子先生もご出席いただけますので、ただいまのお話  
につきまして、いろいろとご意見あるいは何かご質問等がございましたら、  
先生を囲んでいろいろとご歓談をいただければ、大変光栄に思います。そ  
れでは10分ほどの休憩ということで、後ほどまた懇親会を開かせていた  
だきます。よろしく願いいたします。どうも稲畑先生、ありがとうございました。  
(拍手)

ファイル名 : 稲畑汀子氏講演.doc  
フォルダ : A:  
テンプレート : C:\Documents and Settings\takahashi\Application  
Data\Microsoft\Templates\Normal.dot  
表題 : 「国際俳句に関する日本伝統俳句協会の取り組み」  
副題 :  
作成者 : nao  
キーワード :  
説明 :  
作成日時 : 2005/05/31 午後 4 時 1 分  
変更回数 : 2  
最終保存日時 : 2005/05/31 午後 4 時 1 分  
最終保存者 : Tuji  
編集時間 : 3 分  
最終印刷日時 : 2005/08/11 午後 2 時 15 分  
最終印刷時のカウント  
ページ数 : 13  
単語数 : 1,843 (約)  
文字数 : 10,510 (約)